

Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume24, 2009.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3249
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

東日本大震災は、福島原発事故も含めて、人類史的な事件である。広域かつ激甚の自然災害であったと言うばかりでなく、文明の可能根拠や未完了性など深刻な哲学的（もつと正確に言えば、神学的）な問題を含んでいる。大地が揺さぶられることによって、地中であつて目には見えていなかったものが突如地表面に現れ出た有様と似ている。現代文明や技術の液化化現象が見えたのではないか。

*

このように言つたからとて、都市の復興・社会の再生・技術の革新を軽んずるわけでは毛頭ない。復興への努力が今日ほど痛切にかつ高貴に感じられる時代はまたとあるまい。それだけに、かえつて復興の根底は何であるべきかの根源的思考が大切となるのではないだろうか。

*

ひるがえつて、社会もその基礎的集団である小規模人間関係から復興されなければならないと思う。社会の基盤

である人間関係が液状化してきているからである。人間関係において、信頼という炉心が溶解しだしているのだ。

*

信頼にとって言葉は決定的な位置を持つ。言葉が軽薄になったり、裏返ったりする時、人間関係の炉は崩壊する。古人は「巧言令色仁尠」と言った。饒舌は、しばしば自己を言葉の煙幕の中へ晦ます。あるいは言葉の粉飾によって自己を顕示する。『リア王』の末娘コーデリアは、ふたりの姉たちが父王に対して心にもない諂いを言うのを聞いて憤慨する。そしてこう決意する。“Love and be silent.”と。言葉を少なくして、真実さを回復することが、人間関係復興の基盤になるのではないだろうか。

聖学院キリスト教センター所長

小倉 義明